

首楞嚴三昧の研究(二)

早苗亮雄

一

前篇に於て首楞嚴三昧の意義に就いて其の大意を叙述したのであるが、此の首楞嚴三昧に關して、羅什譯『首楞嚴三昧經』の註解をなした釋弘充法師は『新出首楞嚴經序』に其の綱要を論じて「首楞嚴三昧者。蓋神通之龍津。聖德之淵府也。妙物希微。非器像所表。幽玄冥湛。豈情言所議。冠九位以虛昇。果萬行而圓就。量種智以窮賢。絕殆庶而靜統。用能靈台十地。扁鑄法雲。罔象環中神圖自外。然心雖澄一應無不周。定必凝泊在感斯至。故明宗本則三達同寂。論善救則六度彌綸。辯威郊則強魔惛縛。語衆變則百億星繁。至乃微號龍上晦跡塵光。像告諸乘有盡無滅。斯皆參定之冥功。成能之顯事。權濟之樞綱。勇伏之宏要。」(『出三藏記集』卷第七、『縮藏目錄部結一、三十七、八丁』と云つてゐるが實に首楞嚴三昧を讃嘆して其の蘊奥を究めしものと云ふべく、微妙首楞嚴海は既述の如く一切三昧、一切佛法の總府たるのみならず、神通の龍津、聖德の淵府にして菩薩の化他精神は此の首楞嚴三昧より發する功德に外ならない。『首楞嚴三昧經』に「若人得是首楞嚴三昧。是人功德不可

思議。所以者何。是人則爲究竟佛道。成就智慧神通諸明。云云。〔六三五頁〕と云ひ、『大涅槃經』は卷第四、四相品に「我已に久しく此の大涅槃に住して、種々に神通變化を示現す。此三千大千世界の百億の日月、百億の閻浮提に於て種々示現すること首楞嚴經の中に廣く説くが如し。〔昭和國譯大藏經第五卷、九十六頁〕と云へる如く、首楞嚴三昧發得の菩薩及び如來は善く佛道を成就し智慧神通諸明を具足し、其の功徳は神變不可思議にて六度行を示現し、神通力を示現して諸の衆生を教化するのであり、佛陀も亦此の首楞嚴三昧に住して八相成道を示現して衆生を濟度したのである。従つて此の衆生濟度は首楞嚴三昧の最も重要な徳目となつてゐるのである。故に首楞嚴三昧海より發する菩薩の化他に就いて述べ、更に首楞嚴定の修習及び此の三昧と他の一般大乘三昧との關係を順次敘述して結論に進まうと思ふのである。

二

弘充法師の「新出首楞嚴經序」に「論善救則六度彌綸。」と云へる如く首楞嚴三昧發得の菩薩は六度を具足して善く衆生を濟度するのである。故に『首楞嚴三昧經』は六度行を明して以て菩薩が化他門を開く消息を廣く記してゐるのである。

六度とは詳らかに六波羅密多と言ひ、菩薩道を修する者の必ず修習しなければならぬ最勝の行として定立せられてゐるものであつて、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧のことであるが、最後

の智慧は更に方便・力・願・智の四波羅密に開いて十波羅密として説かれる。波羅密多(Paramita)とは到彼岸(又は度彼岸)と翻じ、此の六度が最勝の菩薩道として定立せられるのは、此の六種の勝行のみが眞實に吾人を覺醒して涅槃の彼岸に到らしむるからである。

斯くて六度乃至十波羅密は首楞嚴三昧の發得に先立つて修習さるべきものであるが、首楞嚴三昧發得の菩薩が衆生濟度に當つても亦此の六度の規範に於てなされる。而して六度の内容は『首楞嚴三昧經』に従へば、一般經論に説かれてゐる六度(註一)と大差なく、「一切の貧富苦樂の悉くを捨て、心に貪着なく(施)心を善く寂滅にして畢竟惡を離れ(戒)諸塵中に於て傷くる所なく(忍)勤めて心を觀擇して心の離相を知り(進)畢竟其の心を調伏して一處に住せしめて(禪)心を觀じ心を知り心相通達する(慧)」(六三三頁下段)ことである。已上の簡單なる説明に依つて六度が如何なるものであるかはば明らかになつたと思はれるが、『首楞嚴三昧經』に「菩薩住首楞嚴三昧」。如是法門念念皆有六波羅密。(六三三頁下段)と云へる如く、首楞嚴定發得の菩薩の六度行は修道の方便ではなく三昧發得の果報として念々中に具足されるのである。故に『首楞嚴三昧經』は「首楞嚴三昧檀波羅密本事果報」乃至「首楞嚴三昧般若波羅密本事果報」と云ひ、只單に檀波羅密乃至般若波羅密とは云はぬのであつて、之れが首楞嚴三昧相に於ける六波羅密の特質である。斯くて六度は三昧發得の果報なるが故に首楞嚴三昧持住の菩薩は殊更に六度行を修習しなくとも日常底そのまゝ六度行となり、念々中に六度

を具足し、身行の悉くが六度となり、自由に六度行を示現して衆生を濟度するのである。故に『首楞嚴三昧經』には次の如く六波羅密の具足さるゝ所以を記してゐる。

菩薩住首楞嚴三昧。六波羅密世世自知不從他學。舉足下足入息出息。念念常有六波羅密。何以故。堅意(菩薩)。如是菩薩。身皆是法行皆是法。堅意。譬如有王若諸大臣。百千種香搗以爲末。若有來索中一種。不欲餘香共相熏雜。堅意。如是百千衆香末中。可得一種不雜餘不也世尊。堅意。是菩薩以一切波羅密熏身心故。於念念中常生六波羅密。(六三三頁中段)

斯くの如く六波羅密が首楞嚴三昧發得の果報として具足さるゝのは先に既に六波羅密を修習して身に薰習されてゐるからしてではあるが、修行道に於ける六波羅密と果報としての六波羅密とは既述の如く同じ六波羅密であるが、其の意味は甚だ異つてゐる。修行道に於ける六波羅密は譬へ自利他利及び二俱利(自他俱利)になる如く修せらるゝとも末だ修行道の規範たるをまぬかれぬ。けれど果報としての六波羅密は、修行道に於けると次位を異にし、首楞嚴三昧なる基礎をもつ故規範の域を脱して自在に六度行を示現して六度に執はれない。従つて首楞嚴三昧發得の菩薩は六度行を行じて六度に止らず、一切の執着を離れてゐるから、施に於て殊更に財を他に求めて布施を行することなく、特に戒を受持することもなく、忍辱を修して而も修する所も修せざる所もなく、精進に於て勤めて諸法の善を得るとも實は諸法の善惡を得るのではない。又禪定に住して亂心を治めると雖も

諸法に亂あるを見ず、慧に於て善く大智慧を成就して三界の差別相を分別せず、しかも自在に三界に身を現じ得るのである。(註二)

施に於て乃至慧に於て六度は斯く三昧發得の果報なるが故に三昧發得の十地の菩薩は六度を行することなく、只六度行を示現するに止り、首楞嚴三昧を常に離れぬのである。斯くして始めて衆生濟度の化他が可能となるのであつて、譬へば『首楞嚴三昧經』に、

爲欲教化衆生故。生於欲界作轉輪王。諸姝女衆恭敬圍遶。現有妻子五欲恣。而內常在禪定

淨戒。善能了見三有通過患。堅意。是名菩薩住首楞嚴三昧尸波羅密本事果報。(六三二頁上段)

と云へる如く、菩薩は欲界に生じ、轉輪王となり妻帶し五欲を恣にするが如き破戒行を示現すと雖も内に禪定淨戒を捨つることなく、善く三有の過患を見ることが出来るのである。又菩薩は欲界に生じて衆生の多瞋惡心を斷滅せんがため、身に瞋恨あるを示し、瞋恚の極惡にして必ず遠離すべきものなる事を教へ、忍辱の福德を稱讃すと雖も、瞋恚忍辱を得て其處に安住するのではない。貪欲者・破戒者・瞋恨者・懈怠者・亂心者・無智者を教化せんと欲するが爲の故に貪欲乃至無智を示し、其の極惡なるを悟らしめ布施乃至智慧の最勝行にして必ず修すべきものなることを教へて涅槃の彼岸に到らしむるのである。斯くして菩薩が衆生を教化するのはあたかも導師が難道を案内して旅人を目的地に到らしめ復歸りて他の旅人を案内する如く、又船師が舟をもつて兩岸を往還して人を此岸よ

り彼岸に渡すが如くである。故に大士(菩薩)は船師に譬へられ、導師に譬へられる。『首楞嚴三昧經』『超日明三昧經』など首楞嚴三昧を明す經典は導師・船師・幻師の譬を擧げて詳細に記してゐるが、今『首嚴三昧經』の文を適録すれば即ち次の如くに詳細を極めてゐる。(註三)

譬如導師將諸人衆過嶮道已還度餘人。如是堅意。菩薩住首楞嚴三昧。隨諸衆生所發道意。若聲聞道。若辟支佛道。若發佛道。隨宜示導令得度已。即復還度餘衆生。是故大士名爲導師。譬如牢船從此岸。度無量人令至彼岸。至彼岸已還度餘人。如是堅意。菩薩住首楞嚴三昧。見諸衆生。墮生死四流所漂。爲欲度脫令得出故。隨其所種善根成就。若見可以緣覺度者。卽爲現身示涅槃道。者見可以聲聞度者。爲說寂滅共入涅槃。首楞嚴三昧力故。還復現生度脫餘人。是故大士名爲船師。堅意。譬如幻師於多衆前自現身死屍張爛臭。若火所燒鳥獸所食。於衆人前如是現身。得財物已而便還起以其善能學幻術故。菩薩如是住首楞嚴三昧。爲化衆生示現老死。而實無有生老病死。(六三二頁下段)

此れ彼の彌勒菩薩が『瑜伽師地論』卷第八十(註四)に於て首楞嚴三昧を般涅槃と解して「般涅槃者。於十方界當知究竟不可思議。數數現作一切有情諸利益事。如首楞伽摩三摩地中說幻師喻。若商主喻。若船師喻。」(『大正藏經』第三十卷、七四九頁)と云へるものであつて菩薩の化他を最も善く説明せるものである。然れども菩薩が斯く導師の如く、船師の如く、幻師の如く衆生を濟度し得るのは實に

首楞嚴三昧即ち大涅槃に住してゐるからであつて、若し菩薩にして首楞嚴三昧を失ふが如きことがあるならば、菩薩は自性を失ひ、幻師が自ら假現せし虎狼に食らはるるが如く聲聞道を示現して聲聞に墮し、緣覺乘を示現して緣覺に沈没して再び浮び上ることも出來ざるに至る。然るに菩薩に決してかゝることなきは經に「首楞嚴三昧力故。還復現生度脫餘人。」と云へる如く首楞嚴三昧力に依るのである。

既に明らかなる如く六度を三昧修習の方面より考察するならば、菩薩は六度を修習することに依つて首楞嚴三昧を發得して成佛するのであるが、佛よりせば、佛は首楞嚴三昧に常に住してゐて六度行を示現して衆生を教化するのであり、眞の菩薩の六波羅密行は後者でなければならぬ。此の意に於て首楞嚴三昧未發得の菩薩の六波羅密行は眞の六度行でないのみならず、まして六波羅密を具足してゐるとは云はれない。それ故『首楞三昧經』は、

若人不得首楞嚴三昧。不得名爲深行菩薩。如來不謂此人具足布施持戒忍辱精進禪定智慧。

是故汝等若欲遍行一切道者。當學得是首楞嚴三昧。(六三六頁上段)

と云つてこのことを明らかにしてゐるのである。然れども三昧を一度發得すれば既述の如く念念中に六度を具足するのであるから、六度を行じて以て衆生を教化せんと欲すれば先づ第一に首楞嚴三昧を發得して首楞嚴三昧に安住しなければならない。故に『首楞嚴三昧經』は首楞嚴三昧に住する菩

薩を藥王に譬へて、

菩薩住首楞嚴三昧。衆生見者。貪恚癡病皆得除愈。如大藥王名曰滅除。若鬪戰時用以塗鼓。諸被箭射刀矛所傷。得聞鼓聲。箭出毒除。如是堅意。菩薩住首楞嚴三昧。有聞名者。貪恚癡箭自然拔出。(六三三頁中段)

と讃嘆してゐる如く、首楞嚴三昧發得の菩薩は殊更に衆生教化に當つて衆生に働きかけるのではなく、行住坐臥、城邑聚落郡國にあると食にあると異なることなく首楞嚴三昧に住するが故に自ら化他門が開けて六度行を示現し、以て衆生を教化するのである。従つて首楞嚴三昧は菩薩をして正しき六度行をなさしむる本據である。

註一 金子大榮氏『佛教概論』(三二二頁)に『攝大乘論』の六度を記して「富樂の心に著せず(施)戒に於て犯過の心なく(戒)苦に於て壞心なく(忍)善に於て無懶惰の心を修し(進) この散亂因中住著せずして常行一心に(定)理の如く諸法を簡擇す(慧)」と云つてゐる。之と『首楞嚴三昧經』の六度と比較參照されたし。尙六度の詳細は羅什譯『譯發菩提心經論』(『大正藏經』第三十二卷五一頁已下)を看よ。

註二 『首楞嚴三昧經』卷上(『大正藏經』第十五卷六三三頁——六三三頁)參照。

註三 『超日明三昧經』卷第一(『大正藏經』第十五卷、五四〇)は蓮華、麻油、飛鳥、醫師、船師、幻師の喩を擧げて勇猛伏定より發する菩薩の化他を記してゐる。詳細は就いて看よ。

註四 『瑜伽師地論』百卷は唐の貞觀二十二年(A.D.六四八)に玄奘の譯了した論にして、通常彌勒菩薩造とされてゐるが、果して彌勒が史的人物なるかは疑問であるが、宇井伯嚮博士は『印度哲學の研究』第一(三五五頁已下)に彌勒の史的人物なるこ

さな論證して此の論を彼の述作なりとしてみゐる。

三

首楞嚴三昧は斯く六波羅密の本據にして菩薩の化他は首楞嚴三昧に依つて基礎付けられてゐるのであるが、此の化他は決して下根の衆生に上根の法をもつてするのではなく、『超日明三昧經』に濟脫三界各隨本志。使疾開解得至大乘。譬如醫王持若干藥。各以應病而令服食。風寒熱病即使瘳愈。菩薩如是。以佛法藥療治姪怒癡病。使無有余。〔大正藏經第十五卷、五四〇頁〕

と云へる如く應病與藥にして聲聞には聲聞になつて聲聞法を説き、辟支佛には辟支佛乘に乃至天龍夜叉乾達婆阿修羅には天龍夜叉乾達婆阿修羅に身を現じてよく衆生を教化するのである。後に詳説するつもりであるが、此の首楞嚴三昧は以上の聲聞、辟支佛、八部衆等の一切衆生を離れて別個に存在する形而上學的至高原理ではなく、吾人の日常生活の中に既にあるのであるから、聲聞は聲聞乘に於て、辟支佛は辟支佛乘に於て首楞嚴三昧を發得し得られるのであるから、首楞嚴定發得の菩薩の化他は聲聞乃至八部衆の其身其儘に即して首楞嚴三昧即ち大涅槃に、何等かの方便をもつて至らしめねばならない。而して此の化他方便は首楞三昧海中より生ずるものであつて『首楞嚴三昧經』に従へば首楞嚴三昧の不可思議力用にして普通一般に神通力と稱せらるゝものである。此の意味に於て首楞嚴三昧は「神通之龍津」とされ、此の三昧を證する者は大自在神變を現することが出来る

と信じられてゐるのである。

元來首楞嚴三昧に限らず三昧と神通とは密接な關係を有ち、三昧の發得と神通とは早く阿含の時代から結び付けられ、金剛三昧に入れば「火所不燒刀斫不入水所不漂。不爲他所中傷。」(註一)と云はれ、火光三昧に入れば全身より火を出すことが出來ると信じられてゐたのであるが(註二)、前篇に於て述べし如く三昧は如上の目的ではなくして解脫の手段に過ぎなかつたので、佛陀は決して神力を得る法をしての三昧を佛弟子に數へられはしなかつた。それで佛陀の教團中此の點に不滿を有ち佛陀の膝下を去つた佛弟子も少くない(註三)。然れども神通は當時一般の婆羅門徒の信仰であり、種々の神通が行はれてゐたから佛陀は之等の神通を卑賤下劣なる凡夫の行する所のものにして、賢聖の者の行する所でないとして極力排斥されてゐる。長阿含經卷第十二『自歎喜經』に、

沙門婆羅門以種種方便入定意三昧。隨三昧心作無數神力。能變一身爲無數身。以無數身合爲一身。石壁無礙。於虛空中結加趺坐。猶如飛鳥。出入於地猶如在水。履水如地。身出烟火。如火積燃。以手捫日月立至梵天。(中略)此神足者。卑賤下劣凡夫所行。非是賢聖之所修習。(『大正藏經』第一卷、七八頁下段)

と云つてゐる如く佛陀は空中を飛行したり、水上を歩行したり、身に火を出したりするが如き神通力を決して佛弟子に教へられはしなかつた。然れども佛陀は全く神足道を説かれなかつたのではな

く、『自歡喜經』に正しき賢聖の神足道を教へられて次の如くに云つてゐる。

若比丘。於諸世間愛色不染捨離此已如所應行。斯乃名爲賢聖神足。於無喜色亦不憎惡。捨離此已如所應行。斯乃名曰賢聖神足。於諸世間愛色不愛色二俱捨已。修平等護專念不忘。斯乃名曰賢聖神足。〔大正藏經〕第一卷、七八頁下段）

之に依つて見れば佛陀の意味する神足道は世間の愛色に染着せず之を捨離し、憎惡することなく、愛色不愛色の兩者を俱に忘じて平等心を得る事であつて、世間一般の婆羅門徒の神足と異り、むしろ無上正覺に至る正しき道である。當佛陀は佛弟子中に當時の婆羅門のなす神通に就いて問ふ者のある爲め、外道説に順應して佛弟子を正しき解脱に導かんが爲め假りに神足道を説いたものであると思はれる。又佛陀は此の目的のため當時一般の信仰となつてゐた天眼・漏盡・宿命の三神通等に関しても説かれてゐるが、佛陀にあつては外道と異り、三神通は決して目的ではなく解脱の結果具足されるもの、又は解脱に至る一段階として説かれて佛弟子の修道を鼓舞されしものであると思はれる。斯く神通は佛教の究極目的ではないが、佛陀も全然之を否定されてゐるのではなく、佛弟子中にも神通第一を誇る日提蓮の居る程であるから、神通力は後世佛教の内にかなり説かれてゐるので、大乘教に至つては全く神通は佛教々理に融合してしまつたと思はれる。従つて三昧の發得に依つて神通力を具足すると思惟することは普通一般となり、『首楞嚴三昧經』は百句義中に「現神通力通一

切法性。〔六十〕於宿命智得無所礙。〔十〕天眼無障。〔十一〕得漏盡智非時不證。〔十二〕と云つて首楞嚴三昧を釋してゐる。然れども首楞嚴三昧相に於ける神通は既に一言せし如く首楞嚴三昧の不可思議力用にして衆生化他の方便であり、決して三昧發得の目的ではなく、三昧發得の果報として具足されるのである。

勿論自覺聖智の内容又は三昧發得の境界は言詮不及意路不到であると思はれるが、さればとて此處に自受法樂してゐるのは未だ眞の菩薩道ではない。諸の衆生も俱に同じ法雨に浴し、俱に首楞嚴三昧に迄一切衆生が高められて初めて眞正の菩薩道になるのである。従つてかゝる菩薩道にあつては首楞嚴三昧を何等かの方便に依つて表示し以て衆生の疑義を解き、首楞嚴三昧を開顯しなければならぬ。首楞嚴三昧の不可思議力用即ち神通は此の衆生化他の方便であつて、『首楞嚴三昧經』に佛が堅意菩薩の乞ひに依り初めて首楞嚴三昧あるを説き、更に會中の釋梵護世天王等に此三昧を釋すに當り、無數の如來身を示現し以て首楞嚴三昧の威神力なりとし(註四)、又彌勒菩薩が首楞嚴三昧に住して名意菩薩の爲めに三千大千世界の諸閻浮提中に彌勒を見せしめ、又彌勒が天上にあり、人間にあり、出家にあり、在家にあるを示現し、又十大弟子の相好を身に示現して後首楞嚴三昧に通達すれば一切道行に通達し、二乘乃至佛大乘に通達すると教ゆる(註五)のは神力を假りて首楞嚴三昧を説き、首楞嚴三昧を發得せしめんとする菩薩の大慈悲心であると思はれる。

然れども既に前篇に於て述べし如く、首楞嚴三昧の當相は勇猛伏にして一切の縛相を斷じ有無生滅等の二邊を離れたる自由境なる故に無礙自在であり、又其の體は佛性であり、般若波羅蜜であり、如來藏であるから如實空であると同時に如實不空にして三界の森羅萬象は悉く首楞嚴三昧の顯現にすぎない。従つてかゝる首楞嚴三昧に於ては須彌山も、三千世界も、天龍神等の一切有情も凡て首楞嚴三昧海中のもの、否換言すればかゝるものが首楞嚴三昧なのであると思はれる。故に、『首楞嚴三昧經』に「諸佛神力不可思議。首楞嚴三昧勢力。亦不可思議。」と云へる如く首楞嚴三昧の力用は不可思議にして首楞嚴定發得の菩薩は經に「得首楞嚴三昧。能以三千大千世界入芥子中。令諸山河日月星宿現如故。而不迫迮示諸衆生。」（六三五頁下段）と云ひ又「現意天子善得首楞嚴三昧力故。卽現變應。令衆會者皆作轉輪聖王三十二相而自莊嚴。及諸眷屬七寶侍從。云々。」（六三五頁中段）と云へる如く、三千大千世界を芥子中に入れてしかも山河星宿はもとの如く、轉輪王乃至八部衆等の威儀相好を自由自在に現じ得るのである。

然れども首楞嚴三昧に於ては三界の森羅萬象がそのまゝ首楞嚴三昧であると思はれるから、菩薩が示現せる神通力と現實界と本質的に異なるものではなくして、衆生に衆生相のそのまゝが首楞嚴三昧の果報なることを悟らしめ、不可思議首楞嚴三昧の當相に於ては三千世界も一個の芥子も轉輪聖王も八部衆も何等異なることなく、在家にあるも出家にあるも十大弟子にあるも婆羅門にあるも畢竟

するに首楞嚴三昧の果報であるから其の人に應じて首楞嚴三昧即ち大涅槃に住せねばならぬと教めるのが首楞嚴三昧より發する菩薩の自在神變であると思はれる。

註一 『增一阿含經』卷第四十五ノ五『大正藏經』第二卷、七九二頁參照。

註二 忽洛谷博士『禪學思想史』上卷、(一一八頁)參照。

註三 『增一阿含經』卷第四十七ノ九『大正藏經』第二卷八〇三頁を看よ。

註四 『首楞嚴三昧經』上卷、『大正藏經』第十五卷六三〇頁參照。

註五 『首楞嚴三昧經』下卷、『大正藏經』第十五卷六四三頁參照。

四

上來述べ來れる如く首楞嚴三昧より發する化他は深甚微妙にして善く六度行を示現し、又大威神力を現じて衆生を濟度するのであるが、斯く此の三昧より菩薩の化他が發するのは『超日明三昧經』卷第一に「菩薩雖現泥洹與法身合。亦無往來還復示現隨衆化度。菩薩大士乃達之耳。解知法身。云々。」(『大正藏經』第十五卷、五四〇頁)と云へる如く首楞嚴三昧の發得に依つて菩薩はよく法身を成就するからである。従つて既に屢々述べし如く六度にしても神通力にしても首楞嚴三昧を證得せる結果果報として具足されるのであるから此の衆生化他は首楞嚴三昧に基き、其の化他說法は首楞嚴三昧境に於ける說法即ち法身說法でなければならぬと思はれる。

『首楞嚴三昧經』に「如來住不住法而作化人。諸化人亦住不住法而有所說。」と云ひ、又「又問

云何具足樂說辯戈。答言。菩薩不以我相。不以彼相。不以法相。而有所說。是名具足樂說辯戈。隨所說法文字相不盡。法相亦不盡。如是說者不以二說。是名具足樂說辯戈。」と云ひ、又「如虛空無所隨。一切說法亦無所隨。諸法無比無有譬喩。」と云つて首楞嚴三昧より出づる化他說法の深義を明しゐる如く、首楞嚴定より發する化他說法は不住法（無所住）に於ける說法、無相に於ける說法、無所隨の說法、文字言語に依らざる說法にして對象あつての說法、衆生あつての化他ではない。化者即被化者、凡夫行即六波羅密行であつて首楞嚴定に住する菩薩は六度を行するのでもなく又神力を現するのでもない。それ故『超日明三昧經』に「度脫一切亦無所度。是爲勇猛伏三昧也。」と云へる如く善く一切衆生を濟度してしかも濟度する所なく、山川草木悉皆說法之相であり、首楞嚴三昧であると思はれる。故に『首楞嚴三昧經註序』は首楞嚴三昧に於ける化他の本旨を記して「謂化者以不化爲宗。作者以不作爲主。爲主其自忘焉。」（『出三藏記集』卷第七、『續藏』目錄部、結一、三十、七）と云つてゐるのである。

五

已上の諸說に於て首楞嚴三昧より發する化他說法が如何なる意味のものであるかはいづれ會せられたいと思ふから、次に進んで首楞嚴三昧の修習とは如何なることを意味するかに就いて述べて見ようと思ふのである。

佛教の三昧は既に前篇に於て述べし如く、小乗教に於ても大乘教に於ても變化なく心一境相を意味するものであるから、首楞嚴三昧は此の三昧の境相(對象)たる首楞嚴に心意識を集中することに於て、首楞嚴三昧の發得とは首楞嚴になりきつて間髪を入れざる當處を意味するものであると思はれる。而して首楞嚴とは此の三昧の相に名けしものであつて其の内容を空とし、佛性と云ふも、般若波羅密と云ふも、如來藏と云ふも畢竟此の三昧の異名に過ぎないことは既に述べし所である。從つて首楞嚴三昧の修習とは佛性を開發して佛身を成就することに外ならないものと思はれる。

然らば此の三昧が證得せんとする佛身とは如何なる内容のものなるか。之に就いて『首楞嚴三昧經』に「如來通達一切諸法是寂滅相。是名爲佛。」と云つてゐるから佛とは一切諸法に通達せる寂滅相である。故に一切諸法を外にして寂滅相即ち滅理は求められない。然るに有爲の一切諸法は滅すべく又滅せらるべきものである。故にこの有爲法を滅せる時、其所に滅理が現前すると考へられる。併し之は言ふまでもなく有爲と無爲とに執せる分別である。經に従へば一切諸法は既に皆空である。(註一)故に一切諸法を捨て何處に滅理を求むべきか。若し一切法を捨て、別に佛を求むる者があるなら、演若提多頭を失却してかへつて凡夫を希求する者である。斯くして佛身は一切法と其の本質を異にするものでなく、一切諸法中に求めらるべきものである。

上述の佛を證得せんとする首楞嚴三昧は決して吾人の日常生活を離れたる最高原理でもなければ

ば、又人間社會と全然沒交渉な超越的神でもない。故に吾人の日常生活を離れて別に首楞嚴三昧は求めらるべきものでなく、既に吾人の衆生相そのまゝが首楞嚴三昧の顯れであるから、經は堅意菩薩が佛に此の會中（首楞嚴三昧會）に首楞嚴三昧を得たるものがあるかと問ひしに依り、現意天子（三昧發得の天子）は此の會座の諸菩薩が帝釋身梵王身八部衆乃至優婆塞等の四輩の威儀相好を現じてゐるのは既に此の三昧を得て現じてゐるのであると答へられてゐるのである（註二）。従つて首楞嚴三昧は常に衆生の心行に去至し、音聲言語等の内にもあらはれてゐるのである。従つて此の三昧を得んと欲して殊更に佛行（菩薩行）を行する必要なく、雷凡夫行を行じてゐればよいので、凡夫行に通達しさえすれば佛法と凡夫法とは合致して分たれてゐるものでないことを知るのである。經は此の邊の消息を記して次の如く云つてゐる。

菩薩若欲得是三昧。當修何法。天子（現意天子）答言。菩薩若欲得是三昧。當修行凡夫法。

若見凡夫法。佛法不合不散。是名修集首楞嚴三昧。（中略）云何名修行。若能通達諸凡夫法。佛法無二。是名修集。（六三六頁上段）

従つて首楞嚴三昧發得の菩薩だからと云つて特に佛行を行じてゐるわけではなく、凡夫行を行つてゐるのであるが、首楞嚴三昧を發得してゐるから、凡夫法を行つてゐながら心に貪恚痴なく、凡夫行を行つても貪恚痴の行がないのである。故に衆生は凡夫法凡夫行の當處に於て三毒煩惱をなくして

解脫しなければならぬ。然れども一時に三毒煩惱を悉くなくして此の三昧を證することは出来ないから、『首楞嚴三昧經註序』に「建十准以伺能。」と云ひ又『新出首楞嚴經序』に「冠九位以虛昇。」と云へる如く解行の進展を十地に分け十波羅密を修して愈より細に疏より微に入り最後に最極微細の惑障を斷じて始めて首楞嚴三昧を證得するのである。經は此の消息を射的の譬喩をあげて親切に教へてゐる(註三)。

斯くの如くにして首楞嚴三昧を修習するのであるが既述の如く首楞嚴三昧は一切諸法の外になく、一切法は皆空なる故に差別の相を絶してゐる。従つて首楞嚴三昧の當相に於ては三昧を得るとか得ないとか云ふ得不得の差別なく、又三昧發得の菩薩には一切佛國は悉く住所であり、しかも一切の執着を離れてゐるから住所に執着せず、住所を得ず、又住所を見ない。故に『大乘涅槃經』に「又無住とは首楞嚴三昧と名く。首楞嚴三昧は一切法を知りて著する所無し、無著を以ての故に首楞嚴と名く。如來は首楞嚴定を具足す。」「昭和國譯大藏經」經典部、第六卷、二二三頁と云へる如く一切法に通達して無所著無所住ならば首楞嚴三昧を得ることが出来るものである。又首楞嚴三昧は分別智の作用を絶してゐるから、一切衆生の心行に去至してしかも心行を縁として相を取ることなく、一切衆生の所生處に去至して生處の汚す所となることなく、一切佛處に去至して佛身の相好を分別することなく、又一切の音聲言語中にありて文字の相を分別することもないのである(註四)。然るに凡夫は心

行を縁として相を取り差別なき一切法に於て憶想分別し見聞覺知に執着するからして其れ等の邪見に縛せられて首楞嚴三昧を得ることが出来ない。けれども諸法はもとより無解無縛なる故に縛相に於てもそのまゝ解脫することが出来るのみならず六十二見縛の當處に於てさへも解脫することが出来るのである。經は六十二見の當處に於て如何にすれば解脫することが出来るかに就いて、

云何名爲魔縛。謂六十二見。若人不壞此諸見者。卽於魔縛而得解脫。天女復言。云何名爲不壞。諸見本所從來去無所至。若知諸無去乘相。卽於魔縛而得解脫。諸見非有非無。若不分別有無。卽於魔縛而得解脫。若無所見是爲正見。如是正見。無正無邪。無作無受卽於魔縛而得解脫。諸見非內非外亦非中間。如是諸見亦復不念則於魔縛而得解脫。(六三八頁上段)

と云つてゐるが、要するに六十二見縛に墮するのは吾人の分別智に依り差別なき所に差別を認め有無を分ち正邪内外と分別するからで、かゝる一切の縛想を絶し本來かゝる差別なき道理を知れば解脫卽ち首楞嚴三昧は目前にあるとこのことを意味してゐるのであると思はれる。

之を要するに首楞嚴三昧は決して吾人の日常生活を離れて別に存するのではないから吾々の凡夫身の當處に於て凡夫行凡夫法に通達すれば首楞嚴三昧は得られるのであるが、吾人の憶想分別見聞覺知の爲に縛せられるから得られないのである。一切法に於て分別心を絶し無所得皆空の道理を知り其身其儘無所住となり其心を靈空の如くにすれば首楞嚴三昧を得て佛になるのである。故に首楞嚴

三昧の修習とは經に「菩薩若能觀諸法空無所礙。念念滅盡離於憎愛是名修是三昧。」(六四三頁中段)と云へる如く一切諸法皆空の道理を知り一切の客塵煩惱を離れて寂滅相に至ることである。故に經は百句義の第一に之の三昧を釋して「如何是首楞嚴三昧。修治心猶如虛空。」と云つてゐるのである。

註一 一切諸法皆空如幻。從和合有無有作者。皆從憶想分別而起。無有主故隨意而出。『首楞嚴三昧經』上卷(『大正藏經』第十五卷六三〇頁)

已下經と云ふは首楞嚴三昧經である。

註二 『首楞嚴三昧經』上卷(『大正藏經』第十五卷六三三頁中段)參照。

註三 射的昧譬喩は『首楞嚴三昧經』上卷(『大正藏經』第十五卷六三三頁下段)を看よ。

註四 『首楞嚴三昧經』上卷(『大正藏經』第十五卷六三六頁中段)參照。

六

菩薩は首楞嚴三昧の修習の結果佛身を成就するのであるから更に此の上修定を必要としないと思はれるが經典には更に無數の三昧が説かれてゐる。依つて之等の無數の大乗三昧と首楞嚴三昧との關係を多少述べて見なければならぬが、『大乘涅槃經』は首楞嚴三昧の五義中に金剛三昧の名を擧げ、又『翻譯名義集』は慈恩大師が首楞嚴三昧を金剛藏と翻じたと云つて居り(註一)、亦『大乘義章』も金剛三昧と首楞嚴三昧とを同一視してゐるから金剛三昧と首楞嚴三昧とは密接な關係があると思はれる。依つて金剛三昧に就いて多少知る所を述べ、金剛三昧と首楞嚴三昧との關係を述べることにな

依つて更に一般大乘三昧との關係を述べてみようと思ふのである。

此の金剛三昧は早く阿含の佛典に見ゆる三昧名にして『増一阿含經』卷第三十七ノ四、及び卷第四十五ノ五等は此の金剛三昧の名を擧げ、後者は此の三昧の功德を説いて次の如く云つてゐる。

若有比丘。得金剛三昧者。火所不燒刀斫不入水所不漂。不爲他所中傷。如是比丘。金剛三昧威德如是。今舍利弗得此三昧。舍利弗比丘。多遊二處空三昧金剛三昧。是故諸比丘。當求方便。行金剛三昧。如是比丘當作是學。〔大正藏經』第二卷、七九二頁〕

然れども阿含に説かれてゐる此の金剛三昧は如何なる内容を有つものなるか不明であるが、恐らく阿含の此の經が金剛三昧を大智・等壽二比丘の物語に比してゐる所よりして（註二）、智慧第一舍利弗の大智の堅固なるを金剛に譬へしものであると思はれるから、修道を目的とする三昧と稱すべきではなからう。譬へそれが三昧と稱すべくも傳説を離れてかゝる三昧を阿含の時代に證せる者が果してあつたかは猶研究の餘地があると思はれる。けれども早くよりかゝる種の三昧が重要視されてゐたことに疑ひなく『俱舍論』第二十四、「分別賢聖品」第六之三の頌に、

上界修惑中。斷初定一品。至有頂八品。皆阿羅漢向。

第九無間道。名金剛喻定。盡得俱盡智。成無學應果。〔大正藏經』第四十一卷、九五二頁〕

と云つて有頂地第九品の最極微細の惑障を斷する無間道を金剛三昧と名けてゐるが、金剛三昧を斯く配するのは『俱舍論頌疏論』が「此の定は能く一切煩惱を破すること、猶金剛の能く一切を摧するが如し、故に金剛喻定と名く。」と云へる如く能く一切の煩惱を斷絶して盡智を發せしめ無學果を成就せしめるからである。斯くの如く金剛三昧の徳目は一切煩惱を摧斷して漏盡智を發せしむることにある。此の意味に於て大乘教に至り般若系の經典に屢出づる重要な三昧になつてゐるのである。

羅什譯『小品般若經』は薩陀波崙品第二十七に五十有餘の三昧名を擧ぐる中に如金剛三昧(施護三藏は金剛喻平等三摩地と譯す)の名を擧げ、『大品般若經』も相行品第十及び問乘品第十八に百八三昧名を擧げ其の中に金剛三昧・金剛輪三昧・如金剛三昧の三三昧を數へてゐる。而して此の三三昧中如金剛三昧は小品般若經に出づるものと等しく金剛喻定であるから俱舍論に出づるものとも同一であり、他の二三昧も亦同じ思想系統に屬する三昧である思はれる。而して大品は此の三三昧を別々に釋して次の如く云つてゐる。

如何名金剛三昧。住是三昧能破諸三昧。是名金剛三昧。

如何名金剛輪三昧。住是三昧能破諸三昧。是名金剛輪三昧。

如何名如金剛三昧。住是三昧能貫達諸法亦不見達。是名如金剛三昧。『縮藏』般若部、月三、二十九丁

斯く小品は三三昧を別々に釋してゐるが此の三三昧の總てが大乗三昧なることは既に述べし如く、

『大智度論』が百八三昧を總て摩訶衍三昧なりとしてゐることに據つて明瞭である。従つて俱舍論等に出づる金剛喻定と小品の如金剛三昧とはいづれも金剛喻定ではあるが其の意味に於て多少相異がなければならぬと思ふがしばらく考慮せず、龍樹の大智度論に於ける此の三三昧の註釋を考察するならば、『智度論』卷第四十七、釋摩訶衍品第十八之餘は三三昧の區別を説いて次の如く云つてゐる。

問曰三種三昧何以皆言金剛。(中略)論者言。如金剛三昧。能破一切諸煩惱結使無有遺餘。譬如釋提桓因手執金剛破阿修羅軍。卽是學人末後心。從是心次第得三種菩提。聲聞菩提辟支佛菩提無上菩提。金剛三昧者。能破一切諸法。入無餘涅槃更不受有。譬如真金剛能破諸山令滅盡無餘。金剛輪者。此三昧能破一切諸法無遮無礙。譬如金剛輪轉時無所不破無所障礙。

〔『大正藏經』第二十五卷、四〇〇頁〕

之を考察するに此の三三昧は其の所作の異に依つて分別せられたもので、其の體を別にするものではなくいづれも金剛喻定であり、相互に扶助して其の目的を達成するものであると思はれる。卽ち如金剛三昧に依つて一切の煩惱結使を摧斷して三種の菩提を成就し、金剛三昧に入り一切諸法を破して無餘涅槃を得、更に金剛輪三昧に入りて一切諸法中に於て金剛輪が輪轉して障礙さることなきが如く自在に活動をなし得るに至るのであると思はれる。而して小品が金剛三昧に破諸三昧と

註釋したのは金剛三昧が善く他の諸三昧に通達することを意味せるものと思はれる。若し菩薩が諸三昧を得て其處に安住してゐるならば未だ眞の三昧發得とは云はれない。従つてかゝる執着は破せられなければならない、又破することに依つて始めて諸三昧は己が分内のものとなり其の用を發揮し眞に諸三昧を持することになるのであると思はれる。従つて三三昧は金剛三昧に依つて代表せられると思はれるから金剛三昧のみの考察を試みようと思ふのである。

『金剛三昧本性清淨不壞不滅經』(註三)は此の金剛三昧の功德を詳説して次の如く云つてゐる。

金剛三昧大光隱寂。不見結使使山自崩。不觀煩惱滅四大種。諸愛河竭無常風斷。彌勒當知。如師子振威大吼。一切衆獸自然摧伏。金剛三昧。從毘波舍那出入舍摩他中。如金剛劍入金剛山。不見其迹。是金剛三昧。不住不起不滅不壞不斷不異不脫不變。入慧明性。舉起甚深。一合相智。不見身心法。然後成阿耨多羅三藐三菩提。此菩提智不離不生。無有衆相。不可沮壞。如金剛山無能傾動。金剛三昧不退不沒。入於畢竟大寂滅處。遊戲自在三昧海中。(大正藏經第十五卷、

六九八頁)

之に據れば金剛三昧はあらゆる一切の煩惱結使を摧斷して慧明性に入り、阿耨多羅三藐三菩提智を發せしむる甚深微妙なる禪定にして菩薩の最後心に於て煩惱を摧破する所謂金剛無間智を起して佛智地に入る大三昧王である。従つて金剛三昧の體は大智慧であるから本性清淨であり不壞不滅不増

不減である。故に上掲の文の如く説かれてゐるのである。斯くの如く金剛三昧は其の體を智慧とする大三昧王であるから多くの大乘經典に此の三昧は説かれてゐるが、大乘涅槃經は此の金剛三昧を明し、此の三昧が金剛に喩へられるに就いて三義を擧げてゐる。即ち『大涅槃經』卷第二十二高貴德王菩薩品第二十二之五に、

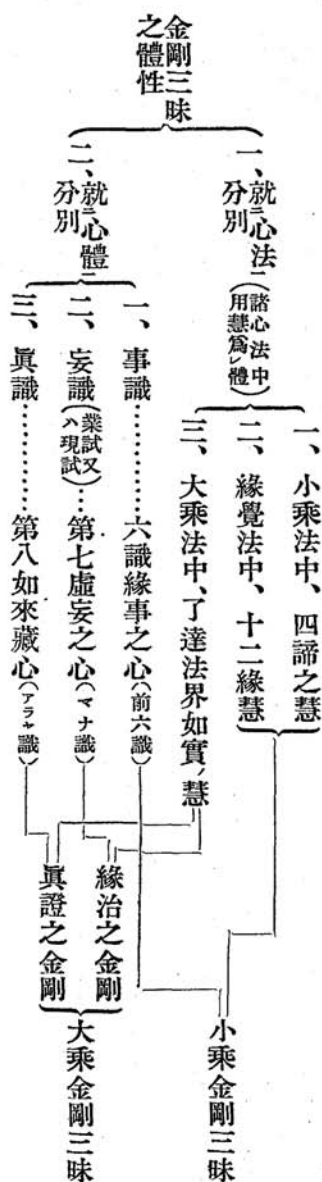
何が故に名けて金剛三昧と爲す。善男子、譬へば金剛の若し日中に在らば色則ち定らざるが如く、金剛三昧も亦復是の如し、大衆に在りて色も亦不定なり。是の故に名けて金剛三昧と爲す(第一義)。善男子、譬へば金剛の一切世人評價すること能はざるが如く、金剛三昧も亦復是の如し、有らゆる功德は一切の人天評量すること能はず。是故に復金剛三昧と名く(第二義)。善男子、譬へば貧人の金剛寶を得れば則ち貧窮困苦、惡鬼邪毒を遠離することを得るが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、是の三昧を得れば則ち能く煩惱の諸苦、諸魔の邪毒を遠離す。是の故に復金剛三昧と名く

(第三義)。(『昭和國譯大藏經』經典部、第六卷、六十七—八頁)

と云へるものであるが、遠法師の『大乘義章』は此の大涅槃の説を中心として十四義を擧げて廣く釋してゐる。今其の名目のみを掲ぐるならば次の如くである。能破義。清淨義。體堅義。最勝義。難測義。難得義。勢力義。能勝義。不定義。者主義。能集義。能益義。莊嚴義。無分別義(註四)。

已上の諸説に據つて金剛三昧が如何なる三昧であるかほぼ明らかになつたと思ふが、然らば大小

乘の區別を同一金剛三昧に如何にして認むるか。之に就いて經典は元より何等の説明をも與へてゐないから、大乘義章の説を述べて見るならば、「大乘義章」は金剛喻定の體性の上から心法と心體とを分ち、小乗の金剛三昧は心法に於て四諦之慧又は十二緣慧を體性とし、心體に於ては事識即ち六識緣事之心を體とするものであるとなし、大乘の金剛三昧は心法に於て了達法界如實之慧を體性となし、妄識(業識又ハ現識)即ち第七虛妄之心を心體とするものを緣治の金剛と云ひ、眞識即ち第八如來藏心を心體とするものを眞證之金剛と云ふとなしてゐる。今之を簡單に圖示すれば次の如くである(註五)。



さて此の二種の大乗金剛三昧中眞證の金剛三昧は如來藏心を心體とするものなる故本性清淨にして能く一切の煩惱を摧破し惑障の破壊する所とならざる故に首楞嚴三昧と云はれ、又佛性とも云はれてゐるので、大乘涅槃經が首楞嚴三昧の五義中に擧げてゐる金剛三昧は此の眞證之金剛三昧であ

る。而して眞證之金剛三昧の詳細を闡明してゐる經典は金剛三昧本性清淨不壞不滅經一卷並びに金剛三昧經二卷である。

上述の金剛三昧と首楞嚴三昧とを比較するに殆んど其間に區別なく大涅槃經は全く同一義に解してゐるのである。然れども全然區別がないのではなく首楞嚴三昧は既述の如く菩薩道に於ける最後地即ち十地法雲地の三昧として佛身の成就を特相とするのであるが、金剛三昧は智慧を躰とし金剛無間智の成就を特相とするものである。而して菩薩は首楞嚴三昧の發得に依つて般涅槃し佛身を成就してゐる筈であるから、更に此の上修道を必要としない筈である。然れども微妙首楞嚴海は『觀佛三昧海經』卷第四觀相品に諸佛世尊の諸莊嚴の具は總て首楞嚴海より生ずと云へる如く(註六)、一切功德の總府にして金剛無間智と雖も亦首楞嚴海より生ずるのである。従つて此の智慧を功德とする金剛喻定は首楞嚴定より以上に出づるものではなく、修習の順序よりしても首楞嚴定より後に修習され且つ首楞嚴定を基礎とするものである。故に『金剛三昧本性清淨不壞不滅經』は菩薩道を十地に分ち、月の譬を引き、十地の菩薩は十五日の月が圓滿にして明相を具足してゐる如く、十地に於て首楞嚴三昧を發得し更に百三昧門を修して然る後に金剛三昧に入ると説いてゐるのである。

其心淡泊安住不動。不沒不退住首楞嚴三昧。菩薩住首楞嚴三昧已。如月天子十寶爲宮。生十寶

樹月精摩尼以爲樹果。此珠力故。月天子宮行闍浮提普施清涼。菩薩摩訶薩住首楞嚴三昧亦復如是。彌勒當知。菩薩摩訶薩住首楞嚴三昧已修百三昧門。然後乃入金剛三昧。(『大正藏經』第十五卷、六九七頁)

斯くして此の經は百三昧を擧げてゐるのであるが、此の百三昧は經に「此百三昧如摩尼珠光光相照。隨入首楞嚴三昧海。菩薩摩訶薩住此百三昧已。所有智慧如空中日諸煩惱海如微烟障。」(『大正藏經』第十五卷、六九八頁)

と云へる如く首楞嚴三昧海に入つて始めて完成するものにして首楞嚴三昧に入ることがとりもなほさず百三昧を修することになるのである。而して首楞嚴三昧が斯く百三昧の總府となるのは首楞嚴三昧の體が佛性であり法身であるからである。法身は『金光明經』卷第二に「此法身に依りて、不可思議の摩訶三昧顯現を得。(中略)大三昧に依りて一切の禪定首楞嚴等、一切の念處、大法念等、大慈大悲、一切の陀羅尼、一切の神通、一切の自在、一切法の平等攝受、是の如きの佛法悉く皆出現す。」と云へる如く大乘三昧の發生する本據にして、此の法身を體とする首楞嚴定には百三昧に限らず大乘一切三昧が具足され、首楞嚴三昧を證することに依つて此等の三昧は始めて其の意義を有つのであるから、首楞嚴三昧を證せずして他の大乘三昧を修習することは出来ないのである。『大品般若經』が百八三昧の初三昧を首楞嚴三昧とせらるるのは此の理に基いたもので、百八三昧門の基體を意

味すると共に大乘三味の總府たることを意味せるものであると思はれる。従つて金剛三味・金剛輪三味・如金剛三味と雖も首楞嚴三味以上に出でず、首楞嚴三味海より出づる功德に過ぎない。依つて『觀佛三昧海經』等第六は「爾時會中有菩薩摩訶薩。名曰持地。卽從生起入首楞嚴三味。三昧力故從金剛際。金剛爲輪。金剛爲根。金剛爲花。」（『大正藏經』第十五卷、六七七頁）と説いてゐるのであり、首楞嚴三味に入つて始めて衆生に金剛三味を示現し得るのであるから『首楞嚴三昧經』は百句義中に「能示衆生金剛心三昧。一切禪定自在隨意。」と説いてゐるのである。

斯くして首楞嚴三味は菩薩道の最後地十地の三味として佛身を成就し、更に無量の大乗三味を修して最後に金剛三味に入り金剛智を證得して妙覺佛位に入るのである。従つて首楞嚴三味を十地の菩薩の初三味とするならば金剛三味は最後心三味である（註七）。雖然も金剛三味は首楞嚴三味に基礎付けられてゐるのであるから首楞嚴三味以上に出ないのである。斯くして首楞嚴三味は大乗三味の總相となり、總名となり、首楞嚴三味に一切の三味、一切の佛法は攝せられ、首楞嚴三味卽大乘佛教の極致と考へられ、菩薩の必ず修習せねばならぬ最高三味として定立せられてゐるのである。

註一 首楞嚴三昧。（中略）慈恩翻爲「金剛藏」。此諸菩薩證此定。故以是爲名。（『翻譯名義集』卷第四、七丁）。

註二 大智等壽二比丘の物語の詳細は、増一阿含經「卷第四十五ノ五」（『大正藏經』第二卷七九二頁）に記されてゐる。就いて看よ。

註三 『金剛三昧本性清淨不壞不滅經』卷は失譯經であるが『大正藏經』第十五卷（六九七―六九九頁）に收録されてゐる。此の經と『金剛三昧經』とを應々混同するも、兩者は全く其の類を異にしてゐる。而して其の思想よりして前者が古出である

と思はれる。

註四 『大乘義章』の金剛三昧の十四義の詳細は、『大乘義章』卷第九(『大正藏經』第四十四卷六三六頁)を看よ。

註五 『大乘義章』卷第九(『大正藏經』第四十四卷六三六頁)參照。

註六

是世界中皆有琉璃頗梨億寶以爲佛窟。是衆窟中各有萬億無量諸佛。諸佛脐中各々皆生一大蓮華。與前無異是諸光明照諸一切十地菩薩。是諸菩薩遇斯光已。卽入微妙首楞嚴門。復得入於金剛喻定。諸天遇者深發無上正眞道意。心眼開明見諸佛相。如此光明照菩薩已。令諸菩薩身諸毛孔。一毛孔中出阿僧祇諸供養雲及衆供具。蓋極小者覆閻淨提。如是衆多雜寶供具不可悉說。此諸具從首楞嚴海生。『觀佛三昧海經』卷第四(『大正藏經』第十五卷六六五頁)

註七

境野黃洋氏『支那佛教史講話』上卷五七八、九頁參照。

七

已上簡單ながら『首楞嚴三昧經』を中心として首楞嚴三昧の昧思想を叙述して來たのであるが、もとより首楞嚴三昧は自覺聖智の境界にして吾人の當底窺ふ能はざるものであるけれども、此の三昧が如何なる三昧であるかは、明らになつたと思はれる。しかし首楞嚴三昧の解釋に關して從來二種あつて廣く世に行はれてゐるのである。卽ち其一是『大智度論』を中心として「健相分別正定」と解するものであり、他は『大涅槃經』に基き「一切事畢竟堅固定」とする説である。此の兩者はいづれも『首楞嚴三昧經』に基いたものであるが、前者は主として其の用より解し、後者は其の體性上よりなせるものである。而して般若を中心とする空系の思想家が其の妙用より釋し、法身常住を主張する大涅槃經が心體に重きを置いて解釋したのは偶然ではないと思はれる。けだし首楞嚴三昧の體性は

經典に明文は存しないが、心法よりせば無分別智(般若)の寂用を、心體よりせば法身(佛性、如來藏心)を體性となせるものと解するを妥當なりと信ず。従つて首楞嚴三昧の發得は法身の成就である。此の事は既に屢々明らかにした事ではあるが、『首楞嚴三昧經』に「有三昧名首楞嚴。若菩薩得是三昧。如汝所問。皆能示現於般涅槃而不永滅。」と云ひ、又百句義中にも「使一切身入於法性皆使無身。」と云ひ、『超日明三昧經』は勇猛伏三昧を發得せる菩薩の威力を説いて「菩薩雖現泥洹與法身合」と云ひ、『大佛頂首楞嚴經』に「三摩提有り、大佛頂首楞嚴王具足萬行と名く。十方の如來一門より超出する妙莊嚴の路なり。」と説き、又首楞嚴三昧を「十方薄伽梵一路涅槃門なり。」佛母真三昧なり。」とし、『大涅槃經』は「佛性なり」「般若波羅密なり」「大涅槃なり」と説き「一切衆生悉有首楞嚴三昧」を主張し、「修行せざるを以ての故に見ることを得ず。此の故に阿耨多羅三藐三菩提を成する能はず。」と教へ、鳩摩羅什は『大乘大義章』に菩薩の二種法身を説き其一を首楞嚴三昧の發得なりとし「十住菩薩。得首楞嚴三昧。令菩薩結使微薄。是人神力自在。與佛相似。名爲法身。」(續藏第二編、第一套、第一冊、二十二)と云ひ、遠法師は『大乘義章』に「佛性義五門五別」を明す段に生因を説き、「言生因者。卽性起彼方便果德。如從眞金起莊嚴具。故名生因。是以經言。復有生因。謂首楞嚴定阿耨菩提。首楞嚴定。卽是佛性。故經說言。佛性名爲首楞嚴也。」(『大正藏經』第四十四卷、四七七頁)と云ひ、又『宗鏡錄』に「首楞嚴三昧令衆作輪王作佛身。」と云つてゐる。之等の諸經論の

諸説を考察することに據つて更に首楞嚴三昧が佛性を開發して法身を成就する最高の三昧であることが知られると思ふ。而して此の三昧の特相として『首楞嚴三昧經』は百句義を、『超日明三昧經』は十事を擧げてゐるのである。今『超日明三昧經』の十事を列記すれば次の如くである。

志一切智無所適莫。不住有爲不住無爲。行普慈心等子衆生。行大悲心等若虛空。

無弟子念無菩薩想。亦無俗志亦無道意。常以大慧順化郡黎。入一切生亦無所生。

現諸佛土不捨法身。等心吾我及與泥洹。(『大正藏經』第十五卷、五四〇頁)

此の十事は勿論首楞嚴三昧の特質として擧げられてゐるのであるが要するに此の三昧の體性たる法身より發する衆生化他の特質を數へしものに外ならないと思はれるからむしろ首楞嚴三昧の特質は、大乘三昧中の王三昧にして善く諸煩惱魔及び魔入を摧伏して菩薩の法身を成就せしめ、衆生教化の化他門を開かしむる點にあるものと思はれる。

首楞嚴三昧は斯くの如く大乘三昧中の最高三昧なる故に古來より最も難解なる三昧とされてゐるので『首楞嚴三昧經』自身が既に「名意菩薩白佛言。世尊。是三昧者修行甚難。佛告名意。以是事故。少有菩薩住是三昧。多有菩薩行餘三昧。」(六四三頁)と云つてゐる程であり、又『首楞嚴三昧經註序』にも「聖錄所謂勇猛者。誠哉難解也。」と云つてゐるのである。然れども此の三昧が印度に於て支那に於て最も歡仰せられし三昧なることは此の三昧が印度及び支那撰述の諸經論に屢々説かれ

且首楞嚴三昧經の研究が甚だ盛なりしことに依つても知らるゝことと思ふが、之に就いては又他日の研究を俟つて述べて見たいと思つてゐる。けだし首楞嚴三昧が尊重せられし所以は、首楞嚴三昧が大乗佛教の極致にして一切の佛法、一切の三昧の總府であり一切の大乗三昧が首楞嚴三昧以上に出ない理があるからであると思はれるが、兎にも角にも首楞嚴三昧の出現に依つて大乘の一切三昧が統一され、正しき佛教の修行道が定立せられしことは禪學思想史上注目に價するものと云はねばならぬと思ふ。(完)

